【曲目解説】

今回のプログラムを御覧になって、「あれ？　一つの曲が分けて演奏されているぞ」と思われた方もいらっしゃるかも知れませんね。同じメンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」と題された曲が、演奏会冒頭に序曲、締めくくりに組曲（劇付随音楽）、と置かれています。御存知の方も多いかと思いますが、同じ題名ながら、序曲と付随音楽とは、全く別の時期に作られた別作品なのです。

メンデルスゾーン（1809・2・3～1847・11・4）が、銀行家の父を持ち、恵まれた環境の下、若くしてその音楽的才能を開花させた天才的作曲家であることは、改めて言うまでもないことでしょう。9歳からピアノ奏者として公衆の前で演奏し、10歳で本格的に作曲に取り組んでいます。1826年、シェークスピアの傑作喜劇「真夏の夜の夢」を読んだメンデルスゾーンは、その強い印象を、すぐに音楽に定着させようとします。その年の7月7日に作曲に取り掛かり、「丸一ヵ月それよりほかのことは何もしなかった」と述懐するほど没頭し、8月6日に完成させました。なんと17歳のときです。この序曲は、メンデルスゾーン家邸内の大ホールで初演されました。

メンデルスゾーンの才能は、作曲のみにとどまらず、古い音楽の研究や指揮者としても優れた成果を上げました。1829年、メンデルスゾーン20歳のときのバッハ「マタイ受難曲」復活上演をはじめ、長い間忘れられていた“バッハ”の価値を人々に知らしめたことも、彼の偉大な功績と言えるでしょう。

さて、そのバッハ（1685・3・21～1750・7・28）には、4曲の管弦楽組曲があります。当時は「序曲」と呼ばれていたようですが、長大な序曲に続き、数曲の舞曲が奏される形式の音楽です。バッハの4曲の管弦楽組曲では、フルートと弦楽合奏による第2番が最も有名ですが、「G線上のアリア」として名高い楽章を持つ第3番も人気があり、しばしば演奏会に取り上げられます。第1番は、弦楽合奏の他、オーボエ2本、ファゴットという小ぢんまりとした室内楽的な作品ですが、これも魅力ある音楽で、あまり演奏されないのは残念なことです。本日演奏する「第4番」ですが、オーボエ3本、トランペット3本、ファゴット、ティンパニーと弦楽合奏という、当時としては極めて大規模な編成をもった、壮麗な音楽です。

プロコフィエフ（1891・4・23～1953・3・5）も才気溢れる作曲家ですが、興に任せて一気に書き上げるというタイプではなかったようです。彼の息子は、父の作曲について問われたとき、「父は先ず、他の作曲家と同じように作曲する。そしてその後プロコフィエフ風にしていくのです」と語っています。「古典交響曲」は、「ハイドンが今生きていたら」というねらいで作曲されたと言われます。確かに「驚愕」の2楽章が好例ですが、ハイドンには、人々を良い意味で驚かせ、楽しませようという創意工夫が随所に見られます。「聴衆にとって直ちに理解でき、かつ独創的である」曲作りが作曲家の重要な課題であると、プロコフィエフは語ります。この古典交響曲でもユーモアと力に満ちた音楽が展開されます。

さて再び「真夏の夜の夢」に戻りましょう。劇付随音楽は、1843年、「序曲」作曲から17年後、プロシャ国王ウィルヘルム4世の委嘱により書かれたもので、全部で12曲あります。多くの演奏会やCD、レコードでは、本日の4曲を「組曲」として演奏するのが通例です。皆様よく御存知の「結婚行進曲」で本日の“晩夏（初秋）の午後の夢”を華やかに締めくくり、お開きと致しましょう。